

生成 AI 時代の英語学習者とは

Evolving Profile of English Learners in the Era of Generative AI

小 田 登志子

Abstract

In the age of generative AI, many English language educators in Japan are reconsidering the qualities that learners should embody. This paper argues that the notion of “autonomous learners” constitutes one such ideal, as evidenced by the prominence of this concept in several influential publications in recent years. However, the development of learner autonomy presents significant challenges, and it is predicted that the disparity between autonomous and non-autonomous learners will increase. This study suggests managing students' use of AI under teacher control, particularly for learners with low autonomy.

キーワード：一般教養英語，生成 AI，自律的な学習者，格差の拡大，プラットフォーム

1. はじめに

本稿は拙稿「生成 AI により一般教養英語はより実用志向へ」（小田，2024）の続編と位置づけることができる。本稿の目的は，2024 年後半から 2025 年 7 月までの生成 AI に関連する日本の大学英語教育界の動向を記録するとともに，生成 AI 時代の英語学習像を論じることである。

生成 AI が大学英語教育そのものの方向性についてどのような影響を与えるかについては小田（2024）においてすでに議論を行った。生成 AI の出現により，英語の実用面は AI に委ね英語教育は教養を目的とする方向にシフトするのではないかという一部の予測に反し，筆者は生成 AI によって日本の大学における教養英語教育はより実用を目指したものになるであろうと予測した。日本の大学教養英語を学ぶ層のほとんどは実用レベルの英語力を身につけることが困難であるが，生成 AI の助けを借りれば実用に足る英語の運用を行うことが可能になるからである。ではそのような実用英語を目指す生成 AI 時代の英語学習者とはど

生成 AI 時代の英語学習者とは

のような姿であるべきであろうか。

本稿では、ほぼ同時期に発表された山田（2025）、水本（2025）、大木（2025）の議論に類似点があることを指摘し、これらの論考に共通する「自律的な学習者」が生成 AI 時代にふさわしい学習者のあり方であると考え。同時に、「自律的な学習者」の養成は容易ではなく、自律的な学習者とそうでない学習者の間で格差が拡大することを予想する。そして自律的でない学習者層のためには、学習者の効果的な AI 利用を支援するプラットフォームを導入することが有効であると提案する。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 章では、議論の背景を概観するために、2024 年後半から 2025 年前半において日本の大学英語教育関係者によって発表された生成 AI 関連の研究を時系列で紹介する。第 3 章では、山田（2023）、水本（2025）、大木（2025）には「自律的な学習者の育成」に類似する主張が共通して盛り込まれていることを指摘する。第 4 章では大学生を対象にしたアンケートの結果を紹介し、学生の多くが生成 AI を自由に使用することを望んでいる傾向があることを紹介する。しかし、学習者の多くが自律的でない現状においては、学生が生成 AI を自由に使用した場合、自分の学習をコントロールできる自律的な学習者と、非自律的であるために盲目的に生成 AI に頼ってしまう学習者の二極化が進むと予想する。したがって、非自律的な学習者層のために、適切な生成 AI 利用を支援する学習プラットフォームを導入することを提案する。第 5 章にまとめと今後の課題について記す。

なお、本稿では議論の対象を日本の大学における一般教養としての英語教育に限定する。高校までの英語教育および大学における専門科目としての英語教育については本稿では扱わない。また、「AI」を大規模言語モデル（Large Language Model, LLM）に基づくニューラル機械翻訳（Neural Machine Translation, NMT）と生成 AI を意味する語として用い、特に生成 AI を指す場合は「生成 AI」と記す。

2. 大学英語教育をめぐる動向（2024 年後半～2025 年前半）

本章では、2024 年後半から 2025 年前半において日本の大学英語教育関係者によって行われた生成 AI 関連の発表を時系列でまとめる。また比較材料として、台湾・韓国・中国（大陸）の様子を紹介する。2024 年前半以前の動向については、小田（2024）を参照されたい。

本題に入る前に、2024 年に至るまでの経緯を簡単に記す。生成 AI 登場以前の日本の大学英語教育界においては、大規模言語モデルに基づくニューラル機械翻訳の影響がもたらした議論の対象となっていた。しかし、ニューラル機械翻訳の教育利用について積極的に発信する教員は限定されていた。また、ニューラル機械翻訳の教育利用を論じるのがためらわれる雰囲気があった。様相が一変したのは 2022 年 11 月に OpenAI によって ChatGPT が一般向けにリリースされた後である。ChatGPT をはじめとする生成 AI が大きな影響を与えたため、

大学教育界全体で議論が活性化した。その影響もあり、2022 年末から 2024 年においては、AI が英語教育に与える影響について論じた発表の数が急増した。このため日本の大学英語教育関係者による AI 関連の発表を網羅することは困難となった。したがって、以下に記す先行研究は筆者の視点に沿って選ばれたものであり、必ずしも全体像を反映しているわけではない。

また、本章で扱うのは 2.3 節のアジア近隣諸国での動向の紹介を除き、日本の学生・教員を調査対象として日本国内で発表されたものに特化している。世界的な研究の動向について関心のある読者は、2000 年から 2009 年の研究動向をまとめた Lee (2021)、2018 年から 2021 年の動向をまとめた Klimova et al. (2023)、2020 年から 2022 年に発表された論文の動向を調査した Ohashi (2024) 等を参照していただきたい。

2.1 節では学会や講演会など、口頭による発表内容のうち、主だったものを紹介する。2.2 節では文書で発表された報道内容や出版物などを紹介する。2.3 節ではアジアの近隣諸国での観察を記す。

2.1 学会・講演等の口頭による発表

本節では、AI と英語教育との関連について発表された学会発表や講演会などの中から、大学英語教育に関連が深いものを中心に、おおよそ時系列に沿って紹介する。京都大学の金丸敏幸氏は国立情報学研究所主催の「大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム」にしばしば登壇し、日本の英語教育の現状について紹介している。2024 年 12 月 3 日には「ChatGPT が語学（英語）教育に与えたインパクト」と題する講演を行った。この中で金丸氏は、AI を有効に教育利用するためには英語教育における教師・学生・AI の三者の位置づけを整理する必要があると述べている。ただし、「AI を利用すると能力が低下する」という信念を持つ教員もいるため、「建設的な議論そのものが難しい」とも言及している。

青山学院大学外国語ラボラトリーは数年にわたって AI と外国語教育の問題について論じる公開セミナーを開催している。2024 年 11 月 28 日には「生成 AI とどう付きあうか：諸分野の取り組みや現状から学ぶ」と題したセミナーを開催した。このセミナーを企画運営する宮澤淳一氏は冒頭で「ヤワなコーヒー萌え」とゴッコ遊び：機械翻訳と生成 AI の振るまいを理解する」と題した講演を行い、安易な AI 利用に対する注意喚起を行った¹⁾。

大学教育とは直接関係ないものの、成田潤也氏による小学校の授業を取材した様子が日本経済新聞によって YouTube で公開されている（成田, 2025）。「AI あるのに、なんで英語勉強するの？」という話題について小学生が議論を行い、AI があれば英語を勉強しなくてもよいと思うか、そうでないか、各児童が自分の立場を表明した。このビデオに寄せられる視聴者からの投稿には、「人と親しくするには自分が英語を話す必要がある」「翻訳のチェックをするために英語を学ぶ必要がある」「今後の英語教育は異文化教育的な意義が強くなる」

生成 AI 時代の英語学習者とは

といった内容が多い。これらは機械翻訳時代の大学英語教員の発言と類似している。

JACET（大学英語教育学会）では「AIと大学英語教育研究会」という支部が2024年4月にスタートし、2025年2月25日に第1回SIG研究大会を催すなど、活動を活発化させている（AIと大学英語教育研究会, n.d.）。

JACET 教育問題研究会は以前から「言語教育エキスポ」とよばれる年次大会において AI をテーマとした会合を開催してきた。2025年3月2日に開催された「言語教育エキスポ2025」では例年のように AI 関連の発表が多数行われた。公開されている『予稿集+』（教育問題研究会, n.d.）に投稿された44の原稿のうち、少なくとも24の原稿（約54.5%）が AI に関連した内容を扱っている。ただし、これは必ずしも日本の英語教育界の全体像を反映しているとは言えない。「言語教育エキスポ」の運営で中心的な役割を果たす酒井志延氏が、AI に関連した研究を行う教員に参加を呼び掛けていることが影響している²⁾。

語学系出版社として知られるアルク社は山田（2025）『ChatGPT 英語学習術』の出版を記念したオンラインセミナーを2025年4月22日に開催した。「生成 AI と英語学習～これからの独学はどう変わるのか～」と題されたこのイベントでは、山田優氏と大木充氏の対談が行われ、筆者はモデレーターを務めた。このセミナー当日には400名以上が参加した。一般向けのセミナーであるにもかかわらず、英語教員と思われる参加者が多数見られた。このセミナーの中で、山田氏は生成 AI を効果的に利用するためには、自らの英語学習の状態を俯瞰的に捉えるためのメタ知識を持つことが重要であると説明した。大木氏はアンリ・オレック（Henri Holec）が1970年代に提唱した自律学習が、生成 AI の出現によって実現可能性を増したと指摘するとともに、山田氏が唱えるメタ知識は自律的な学習者に欠かせないものであると述べた。そして、生成 AI と自律学習の組み合わせが高い学習効果を生み出すという点で山田氏と大木氏の意見が一致した。

2.2 文書による発表

本節では、AI と日本の大学における英語教育との関連について発表された出版物をおおよそ時系列に沿って紹介する。第2章の冒頭でも言及したように、2022年の末に生成 AI が一般に公開されて以降、英語教育と AI に関する出版物が増加した。主に日本で発表された論文を検索する際に用いられる CiNii による検索結果を図1に示す。2020年以降に AI 技術

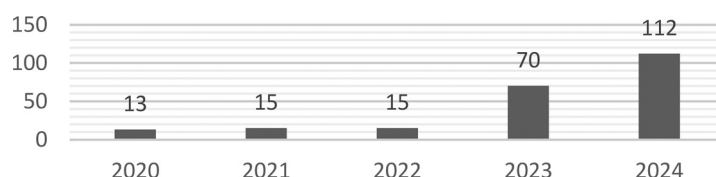


図1 CiNiiで検索した AI と英語教育に関する出版物の数

と英語教育の関連について執筆された出版物の数を調べると、2023年と2024年に急増していることがわかる³⁾。

本稿が対象としている2024年以降の顕著な傾向は、大学英語教育関係者による書籍が刊行され始めたことである。西山聖久氏はこれまでも理系の学生向けに機械翻訳を利用した英語論文執筆の方法に関する著書を多数発表している。2024年10月に『ChatGPTを活用した英語論文執筆の基本』を刊行した。この著書の中で西山氏は機械翻訳と生成AIを併用する方法を解説している。つまり、生成AIの時代になっても機械翻訳に利用価値がなくなるわけではない。

2.1節で紹介した山田優氏の『ChatGPT 英語学習術』は一般向けの書籍として2025年2月に刊行された。生成AIを学習パートナーとして利用するためのノウハウを掲載すると同時に、生成AIを有効活用するには「メタ認知」「メタ言語」などの知識が重要であると述べている⁴⁾。この場合のメタ認知とは、自分の理解を自分で把握するための知識であり、メタ言語とは自分の英語力を客観的に分析するための知識と考えてよい。このように自らの学習を自らの力で管理できると、生成AIに的確な指示を出すことができ、学習効果が上がると説いている。この山田氏の主張については第3章で再度言及する。

2025年5月には李・青山（編著）『AIで言語教育は終わるのか？——深まる外国語の考え方と学び方』が発刊された。筆者が知る限り、生成AI出現後に外国語教育関係者によって編集された日本で初めての研究書である。この書籍は、日本語教育・英語教育・フランス語教育などを専門とする筆者による章から成る。中でも水本篤氏による「AIライティング教育——英語ライティング教育における生成AIの活用と課題」は、海外の研究成果を分かりやすく解説すると同時に、生成AIを利用する際の考え方や具体例を示しており、英語教育関係者にとって指針となる内容である。この水本氏の論考については第3章で再度言及する。

英語教員の間で広く購読されている大修館書店の月刊雑誌『英語教育』から、2025年8月に増刊号『英語教師のための生成AI活用ガイドライン』が発売された。小・中・高および大学の現場で教える英語教員によるさまざまな生成AI活用のアイデアが掲載されている。『英語教育』は過去にも同様の増刊号を発刊しているが、2025年8月増刊号では、「まず教員が生成AIを使ってみるべきである」という主張が複数の筆者（坂上、南部、豊嶋、北島、山田、柳瀬）から挙げられている。生成AIの使用が教員の間でそれほど広まっていないことの表れと推測できる。

この増刊号に掲載された柳瀬（2025）「創造的破壊の波に乗り——英語教師の挑戦と責務」には、生成AIに関して英語教員が話題にしづらい内容が2点記されている。まず1点目は生成AIの教育利用に反対する人がいる事実である。柳瀬氏がChatGPTをライティングの授業で活用し始めた際に「かなりの感情的な反発を受けた。何人もの人がAIのリスクを挙げて、AI利用は反教育的・非人道的だと熱弁をふるった」（p.80）と記している。このよう

生成 AI 時代の英語学習者とは

に AI の利用に反対する人がいることは関係者の間では知られているが、酒井（2024）のような例外を除いては、実名で意見を表明する人物がなかなか現れないため、その主張が明らかになりにくい。2.1 節で紹介した金丸（2025）による「建設的な議論が難しい」というコメントを裏付けるものである。

2 点目として、生成 AI を用いて英語教員自身が英語力を向上させるべきであると提言している。学生が生成 AI を使用するようになると「必然的に質問のレベルも上がる」（p. 81）ため、学生の質問に答えられない教員がいるであろうことを危惧している。確かに、そのような事態を恐れる教員は学生が生成 AI を使用することを好まないであろう。

2025 年 8 月には大木・小田・岩根（編著）『AI を外国語教育で使わない選択肢はもうない』が刊行された。上記の李・青山（2025）が研究者向けであるのに対して、この書籍は現場の教員を対象として編集された。この書籍にはいくつかの特徴がある。まず一つは生成 AI を外国語教育に使用することの正当性について大木充氏が CEFR（Common European Framework of Reference for Languages ヨーロッパ言語共通参照枠）を基に論じたことである。大木氏は第 4 章「AI と CEFR」の中で、外国語学習者は社会的存在（social agent）であり、生成 AI は学習者が自律的な外国語使用者となるための手段の一つであると明確に位置付けている。もう一つの特筆すべき点は、この書籍が幅広い教員に生成 AI の利用を促すために編集されたことである。このため、だれもが簡単に取り組める生成 AI 利用の事例が多数紹介されている。

最後に、大学英語教育関係者が知っておくべきこととして、文部科学省による「AI の活用による英語教育強化事業」について紹介したい。令和 6 年度（2024 年度）補正予算が計上され、事業内容として① AI を英語の授業等で活用するモデル校を指定（約 300 校）② AI 英語活用リーダーによる実践の普及（約 1,200 名）が挙げられている（文部科学省, n.d.1）。事業の内容を一般公開するためのウェブサイトの運用も開始された（文部科学省, n.d.2）。初等中等教育が対象の事業ではあるが、今後はこういった教育を受けた生徒が大学に入学することを視野において、大学英語教育を考える必要があるだろう。

2.3 アジアの近隣諸国の動向との比較

上記のような日本の英語教育界における生成 AI 利用の状況をアジアの近隣諸国の様子と比較してみたい。アジアの動向を視野に入れることで、日本の英語教育の今後を考える上で参考となるだろう。本節の内容は筆者個人の体験に基づく主観的な観察が主であるが、今後の本格的な国際調査のために記したい。

2.3.1 台湾の状況

筆者は 2024 年 11 月 9 日—10 日に台北で開催された The 33rd International Symposium



図 2 Cool English ウェブサイトの一部（台湾教育部, n.d.）

on English Language Teaching and Learning（第三十三屆中華民國英語文教學國際研討會）に参加した。約 140 件の発表のうち、タイトルに AI, ChatGPT 等、人工知能を意味する語が含まれているものが少なくとも 40 件あった（約 28.6%）（中華民國英語文教師學, 2024）。筆者は AI 関連の発表のいくつかに参加したが、発表内容としては、AI を利用した英語学習のケーススタディが多かった。フォーマルな研究はあまり見当たらなかったものの、英語教育における AI 利用に対する意気込みが感じられた。

この学会会場で幾人かの台湾出身の英語教員と会話をする機会があった。筆者が「台湾の英語教員は AI の利用にとっても積極的であるように見える。なぜか?」と質問したところ、「AI 関連のトピックを研究すると、研究費を獲得しやすい」という主旨の回答を複数の教員から得た。また、会場係を務める複数の大学生に話を聞いてみたところ「生成 AI の利用を禁止する英語教員はいない」「学生は授業中も自由に AI を使用している」という回答があった。

これらは台湾教育部（Ministry of Education）が主導する「2030 雙語政策」（2030 年までに若手人材を中国語と英語のバイリンガルにすることを目標に掲げる政策）の反映であると思われる（国家發展委員会, 2021）。台湾教育部が運営する英語学習のオンラインプラットフォームである Cool English は AI チャットボットやライティングアシスタントの機能を備え、スピーキングやライティングの練習を行うことができるようになっている（台湾教育部, n.d.）。

このような台湾の動向を見ると、日本と比較して台湾における英語教育での AI 活用は活発であるように見受けられる。この件に関して、2025 年 6 月に韓国の日本語教育関係者と懇談する機会があったが、彼らも「韓国と比較しても台湾のほうが外国語教育における AI

生成 AI 時代の英語学習者とは

活用に積極的であるという印象を受ける」と述べた。

2.3.2 韓国の状況

筆者は 2025 年 5 月 10 日—11 日にソウルで開催された The 32nd Korea TESOL International Conference に参加した。参加者は韓国で外国人教員として英語を教える英語ネイティブスピーカーが多く、日本の JALT（全国語学教育学会）と雰囲気が良く似ている。この大会は対面発表とオンライン発表の両方を含み、約 250 件の発表が行われた大規模な大会であった。発表タイトルに AI, ChatGPT といった人工知能を意味する語を含むものが少なくとも 65 件確認できた（約 26.0%）（KOTESOL2025, n.d.）。

筆者はいくつかの口頭発表に参加したが、内容としては AI 利用のケーススタディ、AI を利用する際に留意すべき点などについて論じたものが多かった。上記の台湾のケースと同様に、大規模調査やフォーマルな研究というよりは、小規模の教室単位でのケーススタディが主であった。

2.3.3 中国（大陸）の状況

筆者は 2027 年 7 月に 2 週間ほど北京に滞在した際、現地の学生や教員から AI の教育利用に関してコメントを得る機会を得た。中国の 211 工程に属する重点大学の一つである對外経済貿易大学で 7 月 16 日に「Evolving with AI: The Future Direction of English Education」と題する学生向けの講演を行った（Oda, 2025. 7. 16）。参加者は 200 名前後であった。この中で日本の英語教育における生成 AI 活用の現状について紹介した。

その後、参加した学生から中国国内の英語教育における生成 AI 利用についてのコメントを求めた。「あなたの英語の先生は、英語学習の際の AI 使用の是非についてどのように述べているか」と尋ねたところ、5～6 名の学生から発言があった。「大学に入学した 2 年前は AI を使わないようにと言われたが、今では積極的に使うようにと言われるようになった」「英語学習における AI 利用について、学生の考えと教員の考えには少し差があるが、それほど大きな差はないと思う」という主旨の発言があった。実は筆者はこの発表の 2 年前の 2023 年 7 月にも同大学で同様の発表を行ったことがあり、その時と比較すると状況が大きく変化していると感じた。2023 年の発表では、会場の学生からは「英語の先生は生成 AI の利用について何も言わない」「機械翻訳が出す英語には間違いが含まれるという話をする先生はいる」という程度の発言しかなく、AI を積極的に利用するようにと言われたことのある学生は少なくとも会場にはいなかった。

同大学で教鞭をとる教員によると、北京の小中学校では「高考満分」というスマホアプリが使用されている。英語学習専用のアプリではないが、AI による英作文の添削や英会話の練習を行うことができる。さらに、同大学で教鞭を取る複数の外国語教員が、大学でも AI

活用に方針転換するようになったと述べた。学生の発言と一致する内容である。

参考までに、2025年7月時点では、中国国内ではChatGPTやCopilotの使用は禁止されている。通常のインターネット接続ではこれらのサイトにアクセスすることはできない。マイクロソフト社の製品は広く使用されているが、Copilotは使用できない。中国国内で英作文によく使用されるAIの例としてByteDance社（字节跳动）による「豆包（Doubao）」がある。2025年7月時点においては音声でのインタラクティブ機能はないが、テキストでのやりとりはChatGPTの機能とよく似ている。この他、中国発の生成AIとしてよく知られている「Deepseek」など、学生は用途に合わせてAIを使い分けている。

中国においてAIを英語教育に活用する研究が進んでいることを示すデータがある。ブリティッシュカウンシルは、2014年から2023年の間に発表されたAIと英語教育に論文のうち、一定の基準をクリアしたものに対する文献調査を行った。結果として、欧米よりもアジア地域で多くの研究が発表されていることがわかった。アジア地域での研究である45件の論文のうち、17件が中国での研究である。同時期の日本での研究は4件と報告されている（British Council, 2024: 23）⁵⁾。

以上の三つの地域の状況と比較すると、日本の英語教員はAI活用に対してやや保守的であると言える。AI活用イコール正解であるとは言えないが、これらの地域で行われた先行研究は日本の英語教育の参考になるだろう。前述のブリティッシュカウンシルの調査が示唆するように、アジア地域がAIと英語教育研究の先端地であるとすれば、台湾・韓国・中国の事例に学ぶ意味は大きい。

以上、第2章では2024年後半から2025年前半にかけて日本で発表された主に大学英語教育に関する発表や出版物について紹介した。それ以前と比較して、AIと英語教育に関する出版物、特に書籍が増えたことが特徴的である。ただし、比較材料として取り上げた近隣のアジア諸国では、AIを英語教育に取り込もうという動きが日本よりも活発な傾向が見られる。

このようにAIが英語教育界においてトピックの一つとして定着しつつある今、英語教育の動向に関して何か方向性を見出すことができるであろうか。第3章では、2025年に刊行された3点の書籍に共通するポイントを挙げる。

3. 生成AIを活用する自律的な学習者

本稿を執筆した2025年の段階において、日本の外国語教育におけるAI活用に関する議論を牽引するキーパーソンが何人か存在する。まず、外国語教育を専門とする関西大学の水本篤氏である。また、翻訳学が専門であり、翻訳の手法を英語教育に応用することを提唱する立教大学の山田優氏は機械翻訳時代から積極的に発信を行っている。その他、京都大学の

生成 AI 時代の英語学習者とは

柳瀬陽介氏および金丸敏幸氏や千葉商科大学の酒井志延氏も大学英語教育における AI 活用に対して講演等を多数行っている。また、フランス語教育が専門である京都大学の大本充氏は外国語教育全体における AI 活用について多数の講演を行うとともに、生成 AI の利用を盛り込んだフランス語テキスト『私たちの未来が危ない——グレタにつづけ』（大木ら、2024）を刊行している。日本語教育では早稲田大学の李在鎬氏が AI によるライティング支援の研究成果などを発表している。

上記に言及した研究者の中で、山田氏、水本氏、大木氏による論考が 2025 年のおおよそ前半という短い期間の中で書籍の形で発表されていることが注目に値する。かつ、この三者の主張には似通った部分があり、文言は多少異なれども、「自律的な学習者」を生成 AI 時代に目指すべき学習者像として挙げている。つまり、この主張が AI と共存する英語教育が目指すべき目標の一つとなるのではないだろうか。

本章ではまず山田（2025）、水本（2025）、大木（2025）の主張を時系列的に概観する。そして、三者の提案に共通する「自律した学習者」について論じる。

3.1 山田（2025）の「メタ認知」・「メタ言語」

すでに 2.2 節で述べたように、山田（2025）は「メタ認知」・「メタ言語」という用語を提示して、生成 AI 時代に目指すべき学習者像を描いている。メタ認知とは、自分の学習状態を認識する力と言い換えることができる。メタ言語とは、学習対象の英語を把握するための知識である。

これらの二種類のメタ知識は、通常においては教員が持つ類の知識である。英語教員はそれぞれの学習者の理解の状態を把握し、英語のどの側面を学習すべきか常に判断しているからである。山田氏の提案は、各学習者が自らのコーチになることを提案していると言い換えることができる。自分の状態が把握でき、次に何を学習すべきか理解している学習者にとって、生成 AI はまたとない学習パートナーである。的確に指示を出せば、生成 AI はさまざまなリクエストに応じてくれるからである。そして山田（2025）には、英語を自分で学習する一般読者のために、リスニング・リーディング・スピーキング・ライティングにおいて生成 AI を活用するためのテクニックが豊富に掲載されている。

つまり山田（2025）の主張は、生成 AI にアクセスがあるだけでは意味ある英語学習は起きにくく、生成 AI を使用する学習者にそれなりの素養があって初めて生成 AI を活用できることを意味している。そして、そういった生成 AI を活用できる学習者とは、自己管理ができる自律した人物である。

3.2 水本（2025）の「メタ認知リソース利用」

水本（2025）はライティングに焦点を当てて生成 AI の活用方法について論じている。こ

れまでの先行研究では、特にライティングにおいて生成 AI の利用が効果をもたらすことが明らかになっていることに言及し、生成 AI の利用によって学習者がライティングに対する動機や自律性を高めると報告する先行研究 (Lo et al., 2024; Teng, 2024) を紹介している。

この中で水本氏は、自らの論考である Mizumoto (2023) で提唱した「メタ認知リソース利用」(Metacognitive Resource Use, MRU) に触れ、生成 AI を含むさまざまな言語リソースを理解し、学習者が主体的に活用することが重要であると主張している。そのためには「学習者自身が自らの行動や選択に対して主体的に関与する能力であるエージェンシー (agency) が重要になる」(p. 148) と述べている。

言い換えれば、「メタ認知リソース利用」は学習ストラテジーの一種であり、学習者が自分の学習リソースの管理を自ら行い、リソースの一つである生成 AI についても、その特性を自分で理解し、自分のニーズに合うかどうかを見極めなければならないことを意味している。生成 AI によって個別学習が容易になった分、自己管理の範囲も比例して大きくなるのは自然な流れであろう。

3.3 大木 (2025) の「自律的学習者」

大木 (2025) は生成 AI を用いた教育が CEFR (Common European Framework of Reference for Languages ヨーロッパ言語共通参照枠) が掲げる言語教育の方針と合致していると主張する。AI が外国語教育にとって一種の脅威と捉えられている中で、教育現場に広く浸透している CEFR と AI に共通点を見いだすことができるという主張は、多くの英語教員にとって新鮮に映るのではないだろうか。

大木氏は CEFR の複言語主義に基づく教育の特徴として以下の 6 点を挙げている。

(1) CEFR の特徴

- 1) 行動中心アプローチ
- 2) 学習者は「社会的存在」
- 3) 部分的能力を認める
- 4) ネイティブを目標としない
- 5) 生涯学習の奨励
- 6) 自律学習の重視

(大木, 2025 : 75)

ここで注目したいのは「6) 自律学習の重視」である。大木氏はアンリ・オレック (Henri Holec) が唱える自律学習能力として、Holec (1979) より以下の 5 点を挙げている。

(2) 自律学習能力

- 1) 学習目的（目標）の明確化
- 2) 学習内容と進度の決定
- 3) 用いる学習方法と技術の選定
- 4) 修得の経過（リズム，時間，場所など）のチェック
- 5) 修得したことの評価

（大木，2025：82）

驚くべきは、山田（2025）や水本（2025）が唱えた「メタ認知」「メタ言語」「メタ認知リソース利用」に相当する概念が、文言は異なれども 1970 年代に発表されたオレックの思想の中すでに言及されていることである。「1）学習目的（目標）の明確化」や「5）修得したことの評価」は山田氏が唱える「メタ言語」「メタ認知」を強く連想させる。また「3）用いる学習方法と技術の選定」は水本氏が唱える「メタ認知リソース利用」と通じる概念である。

大木氏は、言語の生涯学習を実現するためにも、AI を利用した自律的な学習が重要な手段であると主張する。これは「5）修得したことの評価」を例にとると理解しやすい。自分の外国語の作文の正誤やレベル判断，自分が発音する外国語の発音の判定など，これまでは学校教育内での教員による指導に依存していたことが，生成 AI によって可能になったからである。

以上，本章では山田（2025），水本（2025），大木（2025）に共通する主張を概観した。三者に共通するのは AI を有効利用するために，学習者に自律的な資質を求めている点である。言い換えれば，自分の状態を自分で把握し，次に何をすべきか自分で決められる学習者になることである。次に何をすればよいかはっきりわかっていさえすれば，生成 AI は作文の添削から会話の相手，または文中の単語の整理や説明まで，ありとあらゆることをこなす強力な学習パートナーとなる。

生成 AI を利用して自律的に学ぶ学習者は，下記の図 3 のように，自分で運転をする行為に例えることができる。従来のように，教員に先導されて全員で同じ内容を学ぶバス旅行型の学習もいいだろう。道順を知らなくてもよいし，友達と共に学ぶことは楽しい。しかし，自らの目的地に達するには自分で運転をすることも必要である。ただし，自分で運転をするには，自分が今どこにいるのかを把握し，次にどちらの方向に曲がるのか，どの程度のスピードで走るのかを自分で決めなくてはならない。

図 3 について一点補足する。自律学習（autonomous learning）は，個人学習（individual learning）⁶⁾ を意味するわけではない。自律学習は教員から指導を受けることを排除しない。図 3 のイメージは学習者が自らの学習を主導するという意味で用いる。

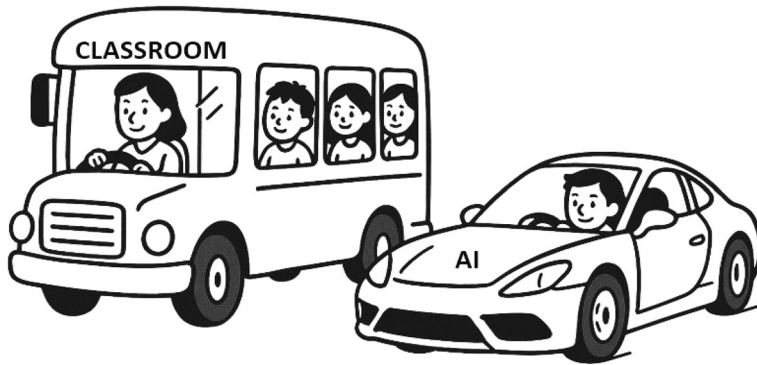


図3 AIを利用した自律的な学習への移行のイメージ（GPT-4oを用いて作成）

4. 非自律的な学習者を支援するためには

第3章で概観した山田（2025）、水本（2025）、大木（2025）が描く自律的な学習者像は理想的である。しかし同時に、筆者を含む日本の大学で教鞭をとる英語教員の大半にとって、この学習者像は実現しづらいものと映るだろう。自律的な学習者（autonomous learner）の養成はそれほど簡単ではなく、少なくとも日本の教育機関においてはそれほど成功していない。Nakaya（2011）は日本の高校英語教育において学習者が自律性を発揮する機会は限られており、自律性を十分に育成できておらず、学習者の間には依存的な学習習慣が根強いことを指摘している。こういった自律性の低い学習者は、生成 AI を盲目的に利用し、結果として依存してしまうかもしれない。

本章ではまず、大学生に対するアンケート調査の結果を紹介し、外国語のライティング課題を行う際に生成 AI の出力を提出物とすることを肯定的に捉えている学生が一定の割合で存在することを指摘する。そして、自律的な学習者養成が困難な状況の中で生成 AI の使用が拡大すると、学習者の英語力格差が拡大すると予測する。そこで、自律的でない層の学生に対応するために、学生の生成 AI 使用を教員が主導することを提案する。

4.1 学生に対するアンケート調査

生成 AI の利用に関しては、教員と学生の間で意見が大きく異なる可能性がある。水本（2025）や『英語教育』2025 年 8 月増刊号に投稿された現場の教員による教え方の事例を見ると、「まず自分で英語（外国語）を書いて、それを生成 AI に添削させる」という提案が行われている。生成 AI の出力をそのまま提出物と見なす提案は見当たらない。

これは外国語教育に限ったことではない。参考までに、大学でのエッセイに関するアメリカの報道を紹介する。Fox ニュース（Fox News Clips, 2025.5.28）によると、アメリカの

表 1 外国語の作文の課題を行う方法として採用してよいと思うもの（複数回答可）

	選択肢	人数	%
1.	自宅ではなく教室で試験形式で作文を行い、その提出物を評価する。	8	36.4%
2.	作文の内容をあらかじめ告知して学生に自由に準備をさせ、教室で試験方式で作文を行い、提出物を評価する。	7	31.8%
3.	自宅で行う課題として作文を課し、生成 AI の利用を禁じ、提出物を Turnitin でチェックしたのち評価する。	4	18.2%
4.	自宅で行う課題として作文を課し、生成 AI を使用した場合どのように利用したか申告させて、提出物を評価する。	6	27.3%
5.	自宅で行う課題として作文を課し、自力で書いた作文の校正に限り生成 AI の使用を認め、提出物を評価する。	5	22.7%
6.	自宅で行う課題として作文を課すが、Google ドキュメントのようにライティングの過程が記録されるツールを用いることを条件とし、提出物を評価する。	6	27.3%
7.	自宅で行う課題として作文を課し、その音読の録音を評価の対象とする。	5	22.7%
8.	自宅で行う課題として作文を課す。生成 AI を用いるスキルも本人の外国語運用能力の一部と考えて利用を許可し、提出物を評価する。	7	31.8%
9.	選びたい選択肢がない。	0	0.0%

n=22

大学で Blue Books とよばれる解答用冊子が売り上げを伸ばしている。教員が学生に対して自宅で書いたエッセイを提出させる代わりに、教室内で解答用冊子にエッセイを記入させる方法に切り替えているからである。このほか、番組内でインタビューに答えたある教員が、学生に Google ドキュメントを利用してエッセイを書かせ、ドキュメントヒストリー上で生成 AI の出力を丸写ししたような形跡が発見された場合は詳しく調査を行うと述べた。いずれも生成 AI の出力を提出物とさせないための方策である。

このような教員の思いとは裏腹に、学生の間ではいささか異なる認識が見られる。2025 年 7 月に東京都内に所在するある私立大学でアンケートを行った。この大学はすぐれた外国語教育で知られており、学生は外国語学習に関心が高い。このような学生は外国語の学習に愛着があり、生成 AI を用いて作成した外国語の作文をそのまま提出することには抵抗があるのではないかと思いきや、結果は筆者の予想とはかなり異なるものだった。

表 1 は「外国語の作文をどのように課しどのように評価すべきかについて、現在までに挙げられている教員側の主な対応策のうち、採用してもよいと思う選択肢を選んでください」と問い、無記名方式で学生が回答した結果である⁷⁾。複数回答可で、30 パーセント以上の学生が選んだ選択肢が三つあり、正反対の内容の選択肢が含まれていることが興味深い。一つ目は「1. 自宅ではなく教室で試験形式で作文を行い、その提出物を評価する」である。いわゆる「教場レポート」と呼ばれる方式である。二つ目は「2. 作文の内容をあらかじめ告知して学生に自由に準備をさせ、教室で試験方式で作文を行い、提出物を評価する」である。あ

る学生が、この方法を採用してもよいと思う理由として「生成 AI を禁止するのはよくないが、生成 AI の出力をコピーして解答するのもよくない。2 はこれらの条件を満たすから」と述べた。

三つ目が「8. 自宅で行う課題として作文を課す。生成 AI を用いるスキルも本人の外国語運用能力の一部と考えて利用を許可し、提出物を評価する」である。つまり生成 AI の出力を提出物とすることが可能である。この方法を支持した学生の何人かに理由を述べてもらったところ「教員は生成 AI の利用を前提にして評価すればよい」「今後は生成 AI を使用するスキルが重視されるから」と答えた。ただし 8 の選択肢は回答した学生の間でも意見が分かれ、「論外だと思う」「これは IT スキルなので外国語の授業にはふさわしくない」という意見も寄せられた。

表 1 の学生の回答傾向は筆者にとって予想しないものであった。そこで、同世代の動向を確認するために、別の場所でも大学生に対する聞き取りを行った。表 1 の調査を行った一週間後に訪問した中国・北京の大学の授業において、52 名の学生に同じ内容の質問を英語で行い、どの方法を支持するか挙手で回答してもらった。すると驚いたことに、8 の選択肢が最も人気を集め、28 名 (53.8%) の学生がこの方法を支持した。何人かの学生に 8 を支持する理由を聞いたところ、「選択肢に記されている通り、生成 AI を用いるスキルも本人の外国語の能力のうちだと考えるから」という主旨のコメントがあった。この結果を併せて考えると、表 1 で 8 の選択肢に支持が集まったのは偶然ではないと考えられる。参考までに、この大学は中国の重点大学の一つであり、学生の英語力は高い。筆者としては、厳しい受験社会である中国の学生は 1 のような公平性・透明性を重視した方法を好むと想像していたが、この予想は大きくはずれ、1 の選択肢を支持した学生は 15 名 (28.8%) にとどまった。

学生に対するアンケート調査の結果をまとめる。生成 AI の利用に関する見解は学生の間で多様であるものの、生成 AI の出力による外国語の作文を提出してもよいと考える学生がかなりの割合で存在することがわかった。

4.2 起こりうる格差の拡大にどう対応するか

第 3 章で概観したように、山田 (2025)、水本 (2025)、大木 (2025) は自律的な学習者像を提案している。そして 4.1 節では生成 AI の出力を提出物としてよいと考える学生が一定数存在することがわかった。この二つから何が予想できるであろうか。

一つは英語力の格差の拡大である。大木 (2025) が主張するように、生成 AI は学習者の自律的な学習を以前よりも容易にし、一部の学生に有益な効果をもたらすだろう。英作文の添削や生成 AI との会話練習などが好例である。こういった作業は、従来は教員の助けなしでは実施が困難であった。

一方、どれほど便利な道具があっても英語を学習したくない層は存在する。また、やる気

はあっても行動に移すことができない非自律的な学習者も多数存在する。多くの英語教員にとっての心配事は、このような学生が生成 AI を盲目的に利用して自ら考えなくなることであろう。2.1 節で言及した金丸氏の発表で引用されている「AI を利用すると能力が低下する」という信念を持つ教員は、こういった状況を心配しているのではないだろうか。

このような懸念は機械翻訳時代から繰り返し指摘されている。教員からだけでなく、学生自身からも自らの英語力の低下を不安視する声が挙がっている。小田（2023）は、機械翻訳の影響で英語学習の意欲が上がった学生（34.3%）と下がった学生（26.3%）の二大グループが存在することを指摘している。そして「分からないことがあったらすぐに翻訳してしまう癖がついて、英語力がとても下がったと実感しています」という学生のコメントを紹介している（p.150）。英語力の格差拡大の可能性は、教育分野以外の識者からも指摘されている。経済学者の成田悠輔氏は、英語が必要な人とそうでない人の間で英語力が「二極化していく」と述べている（TBS NEWS DIG, 2022）。以上を鑑みると、生成 AI による学生間の英語力の格差拡大は十分に起こりうると考えられる。

ではそのような格差拡大に対して、英語教員はどのような方策を取りうるのか考えてみたい。特に今回は、自律的な学習者になりにくく、生成 AI に依存すると考えられる層に対してどのようなアプローチが可能か考察する。生成 AI の活用を通じて英語力が向上すると考えられる層へのアプローチについては、PEP（プロジェクト発信型英語プログラム）（立命館大学, n.d.）など、先進的な取り組みを行っているグループに議論を譲りたい。

一つの方法として、生成 AI を組み込んだプラットフォームを構築し、学生の生成 AI 利用を管理できるようにすることが考えられる。例えば、学生は英作文の課題を教員が指定するプラットフォーム上で行い、まず自分自身で考えた英語を入力し、次に生成 AI による修正を行い、さらに自身が納得のいく内容に訂正したものを提出させる、といったプロセスが一括管理できるシステムである。そして、教員が、添削前、添削後、提出版のそれぞれの状態や、学生が生成 AI に対して入力したプロンプトを確認することができれば、生成 AI への安易な依存を検知するとともに、学習につながる AI 使用を支援することができる。

このアイデアは、杉山滉平氏が手がける Transable（Transable, n.d.）と LMS（Learning Management System 学習管理システム）を合体させたようなものと言い換えることができる。Transable は外国語による作文を目的とし、機械翻訳と生成 AI を組みこんだプラットフォーム型のアプリである。複数のアプリを行ったり来たりする必要がないように、日本語による原文、機械翻訳による翻訳、逆翻訳、生成 AI による添削、生成 AI によるレベル評価などが一つのサイトで行えるように設計されている。2025 年 7 月の現在では、このアプリは学校の授業での利用を主旨として申請を行った利用者に対して無料で提供されている。しかしほとんどの教員はこのようなプラットフォームへのアクセスがなく、機械翻訳、生成 AI、文法チェック用アプリなど、複数のアプリを個々に学生に使用させているため、Trans-

able は効率化の手段の一つとして注目されている。

ただし、教員が学習者の AI 使用状況を一括管理できるシステムは見当たらない。したがって、教員が学習者による AI 使用の詳細を把握するためには、AI とのやりとりを何らかの形で学習者に提出させているのが現状である。例えば、幸重（2023）には、学生が機械翻訳を利用して英語スピーチ原稿を作成する際の資料（日本語のソーステキスト、プレエディットを行った日本語、英訳、ポストエディットを行った英語、逆翻訳結果）を全て提出させる方法が紹介されている（p.209）。筆者も学生による生成 AI とのやりとりをワードファイルにコピー＆ペーストして提出させてきた。

しかし、この方法には少なくとも二つの問題点がある。まず、学生の生成 AI 利用をコントロールすることが非常に困難である。筆者は他の多くの英語教員と同様に、学生に対しては「自力で書いた英語を生成 AI に添削してもらおうように」と指示している。しかし、学生が提出した生成 AI とのやりとりを見ると、明らかに機械翻訳等を利用した英語を生成 AI の添削にかけている学生がいる。同様の観察を他の教員も口にしていて、二点目は、データの管理が困難であるという点である。学生が筆者に提出する AI とのやりとりは分量が多く、保存や管理に労力を要する。提出形式を統一するのも困難である。授業研究のためならともかく、日々の授業で管理できる分量ではないと感じる。つまり、英作文を主な目的とした学習プラットフォームを利用することには次の利点があると考えられる。

(3) AI を組み込んだ学習プラットフォームの利点

- a. 学習者による AI 利用を許容しつつ、安易な AI の利用を検知し、効果的な AI の利用を主導しやすい。
- b. 学生による生成 AI 利用のデータ管理を容易にする。

もう少し具体的に、英作文を例にして LMS 型の学習プラットフォームの機能を（4）に提案する。

(4) 提案：英作文で使用する際の LMS 型プラットフォームの機能

- a. 最初の入力では学習者が自分で英語を入力することが求められ、コピー＆ペーストはできない。
- b. 生成 AI による添削を行うことができる。この際、生成 AI の学習モード（Study Mode）を利用するとともに、フィルタリング機能を搭載した生成 AI を利用する。
- c. 生成 AI による添削を基に、学習者が手直しを行うことができる。
- d. 完成した英作文を基に、生成 AI との会話による質疑応答を行うことができる。
- e. 教員が個々の学生の活動の記録を閲覧し、フィードバックを与えることができる。

- f. 学習者同士が互いの英作文を閲覧できる機能を備える。

以下に補足を述べる。(4a) に提案したコピー＆ペーストを防ぐしくみをどのように実現するかは技術者に委ねたい。完全に防ぐことはできなくても、ペーストを検知して警告を出すだけでも一定の抑止効果はあるだろう。

(4b) の「学習モード」とは Open AI が 2025 年 7 月 29 日に発表した Study Mode を指す (Open AI, 2025.7.29)。質問に対してすぐに答えを示さず、ヒントや問いかけを提示して利用者に自ら考えるように促す機能である。ただし、本稿を執筆した時点ではこの機能が追加されたばかりのため、実際の使い勝手については今後の観察を待たなければならない。さらに、瀧田・宮崎 (2025) によって報告されている「都立 AI」のように、入力内容が AI に学習されず、不適切な内容を排除するフィルタリング機能が搭載されていると安心して教育利用を行うことができる。TOEFL や IELTS の英作文の練習のためには、予想得点を出す自動採点の機能があると便利である。

(4c) は学生が自分の習熟度にふさわしい英語を取捨選択することを目的とする。簡単な英語に修正する、特定の表現を言い換えるなど、すでに生成 AI で可能な操作を想定している。Transable にはこれらの機能のいくつかがプルダウン式のメニューとして装備されている。

(4d) は生成 AI の音声による対話機能を活かしたものである。AI を利用すると、どうしても学生が自らの能力を大きく超えた英作文を提出しがちである。学生が自分の提出物として完成させた英作文は、学生自身が正しく音読でき、その内容に関する質問に答えられることが望ましい。筆者が CEFR A2～B1 レベルの学生と試した範囲では、簡単な英語で質問をするように生成 AI にリクエストしたり、難しい質問は飛ばしたりすることを許可すると、学生と生成 AI との口頭での質疑応答が何とか成立する。

(4e) の機能は学校現場の教員の負担軽減のために重要である。現在のように、個々の教員が学生の学習履歴を手作業で集約しなければならない状況では、生成 AI の利用を普及させることは困難であり、教員が「生成 AI の利用は一切禁止」というルールを設ける一因となる恐れがある。あるいは学生が生成 AI を使用したくないように、まとまった量の英文を書いたり話したりする能動的な活動をやめてしまうケースが出かねない。これでは英語教育の後退を招いてしまう。

(4f) に提案した学習者間の閲覧機能は、協同学習 (cooperative learning) を推進するための方策である。生成 AI は個別学習の助けとなる一方、学習者には協同学習的な学びも必要である。プラットフォームに学習者間での学びを促す仕組みを取り入れると、バランスがとれた学習をデザインできるのではないだろうか。

さらに、(4a-f) の機能は学習の目標に応じて選択可能であると便利であろう。例えば、文法の定着度を確認するための英作文は生成 AI による添削なしで提出させると学生のつまづ

きを発見しやすい。英語プレゼンテーションの原稿作成には生成 AI による添削を許可すると、学生が自分で原稿を準備することができる。学習者同士の閲覧も、それが有益な場合に限ったほうがよい。

一点誤解の無いように補足すると、(4) の提案は自律的な学習者の育成を放棄するという意味ではない。むしろ、学習者に AI の効果的な利用を体験させ、将来的に自律した利用を行うための足場かけ (scaffolding) と位置付けることができるのではないだろうか。

ただし、このようなプラットフォームの構築には、企業の力が必要であろう。しかし、企業によるパッケージ化された製品は、多くの教育機関にとって手が届きにくい価格になる可能性がある。企業が自由競争の下で豊富な機能を備えたサービスを販売すると同時に、機能を限定した安価なプラットフォームを公費で作成することができれば理想的である。機能を限定するためには、英語教員からのフィードバックが欠かせない。教員が現場での体験を基に、どのような機能が必要なのか、あるいは必要でないのかを明らかにして助言する必要があるだろう。

5. おわりに

本稿では 2024 年後半から 2025 年前半までの間に起こった日本の大学英語教育をとりまく状況について概観した。そして、2025 年の前半に発表された複数の論考において、生成 AI を有効活用できる自律した学習者像が推奨されていることを指摘した。しかし自律的な学習者の育成はそれほど容易ではない。学生が生成 AI の出力を提出物とすることにかかなり肯定的であり、かつその学生が自律的でない場合、それは生成 AI への安易な依存につながりかねない。これを防止するために、本稿では生成 AI を組み込んだ LMS 型のプラットフォームを構築し、学生の生成 AI 利用を教員の管理下に置くことを提案した。例えるならば、図 3 で示した自分で運転する学習者の車に自動運転機能のオプションを装備するようなものである。これは山田 (2025)、水本 (2025)、大木 (2025) が推奨する自律的な学習者の姿とは異なるかもしれない。しかし、自律的な AI 利用を促進するための最初の一步と考えることができるのではないだろうか。

本稿の限界と今後の課題について述べる。本稿の一部、特にアジアの近隣諸国の状況については、各地域の状況を俯瞰するデータがなく、聞き取り調査の報告に留まった。大学生に対するアンケート調査も小規模なものに留まった。したがって、これらの結果は今後の調査によって確認されるべきである。生成 AI の利用が広まると学習者間の格差が拡大するという予想についても、近い将来に検証を行うことが必要である。この点については、日本よりも AI の導入が進んでいるアジアの近隣諸国での状態が参考になるかもしれない。そして、学習者による効果的な AI 使用を支援するプラットフォームを具現化するためには広範囲の

協力体制が必要であり、現場の英語教員のフィードバックが欠かせない。

しかし、教員に課された課題のうち、テクニカルな細部の議論よりも重要なのは、生成 AI を学習パートナーとして学習者が自らの考えを英語で書いたり話したりする機会を豊富に設けることであろう。生成 AI を利用した英語学習の具体的な目標を示すことと言い換えることもできる。そうすることで、より高い英語学習の目標を実現するためのツールとして、第 4 章で提案したプラットフォームが生かされるだろう。本稿が全国の英語教員との対話の糸口の一つとなれば幸いである。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP23K00780（代表 瀧村裕子）の助成を受けたものである。本稿の執筆に際して、瀧村裕子氏および山田優氏に日頃より助言をいただいた。また、「言語教育エキスポ 2025」ならびに「AI とクリエイティブラーニング研究会」（2025 年 6 月 21 日）の参加者からいただいた助言に対して感謝の意を表したい。また、アンケートにご協力いただいた大学生のみなさんにもこの場を借りてお礼申し上げたい。

注

- 1) “ヤワなコーヒー萌え” とは、利用者が注意すべき以下の機械翻訳の特徴を表す。ヤ：訳抜け（途中が訳出されないことがあり、原文と訳文を照合しない限り気づきにくい）、ワ：湧き出し（原文と無関係な語句が訳文に盛り込まれる現象が生じることがある）、な：ナンバー（数字の誤転記がたまに生じる）、コーヒー：肯定と否定（意味が逆転することがある）、萌：モダリティ（心的態度が額面とズレることがある。特に may/might, perhaps が「かもしれない」ではなく「おそらく～だろう」となることが多い、え：エディット（プレエディットとポストエディットの必要性）（宮澤・北野、2025）
- 2) 参考までに 2025 年 8 月に東京で開催された The 64th JACET International Convention のプログラムに掲載されている 175 の発表のうち、AI に関連すると思われるものは少なくとも 30 件である（約 17.1%）（JACET, 2025）。
- 3) CiNii（<https://cir.nii.ac.jp/>）での検索条件は以下の通り。「英語 AI」を検索語として入力。検索対象の期間を 2020 年、2021 年、2022 年、2023 年、2023 年、2024 年に限定。出力結果の「論文」および「本」のタイトルを目視で確認し、AI と英語教育・英語学習に関連した内容だと判断できるものを手作業で抽出した。英語以外の言語の教育、メディアリテラシー全体、自然言語処理、翻訳学についての刊行物と思われるものは除外した。LLM 技術の一つである「機械翻訳」を検索語に加えると結果は異なると考えられる。
- 4) 山田（2025）は「メタ認知」「メタ言語」の他に三つ目のキーワードとして「プロンプトエンジニアリング」を挙げているが、本稿では「プロンプトエンジニアリング」については議論しない。
- 5) 論文数の概要は以下の通り。アジア 45 件（中国 17 件、台湾 8 件、日本 4 件、韓国 4 件その他 12 件）、ヨーロッパ 9 件、北米 6 件、ヨーロッパアジア 5 件、アフリカ 1 件。

ブリティッシュカウンシルはなぜアジアに研究が集中するのかその理由については述べてい

ない。しかし、筆者個人としては理解できる結果である。英語の習得に苦勞しているのは特に日本・中国・韓国などの東アジア地域の人々である。アメリカ国務省 FSI の発表でよく知られているように、英語と日本・中国語・韓国語のような言語との差は、英語とヨーロッパ言語の差よりもはるかに大きい (US Department of State, n.d.)。これらの人々にとって生成 AI が問題解決のツールと映るのは不思議ではない。

- 6) さらに補足すると、個人学習とは一人で行う学習形態を指す。一人で学習を行っていたとしても、他人に言われるままに学習する場合は自律学習とはみなされない。
- 7) アンケートは言語学関連の科目の授業時間内に行われた。出席者 22 名のうち、22 名から協力を得た。回答者自身が Google フォームの QR コードをスマートフォンでスキャンし、無記名方式で回答した。結果はただちに回答者と共有された。

引用文献

〈日本語〉

- 青山学院大学外国語ラボラトリー (n.d.) 「生成 AI と どう付きあうか：諸分野の取り組みや現状から学ぶ」 青山学院大学外国語ラボラトリー主催 公開セミナー 2024 https://www.agufl.aoyama.ac.jp/info/info.php?_w=News&_x=detailshow&id=439 (2025 年 7 月 28 日閲覧)
- アルク (2025. 4. 22) 「生成 AI と英語学習——これからの独学はどう変わるのか」 オンラインセミナー AI と大学英語教育研究会 (n.d.) 第 1 回 SIG 研究大会 <https://sites.google.com/view/jacetaisig/%E6%B4%BB%E5%8B%95%E5%86%85%E5%AE%B9?authuser=0> (2025. 7. 27 閲覧)
- 大木充・安藤博文・石丸久美子・杉山香織・高橋克欣・長谷川晶子・堀晋也・柳光子・Jean-François Graziani (編著) (2024) 『私たちの未来が危ない——グレタにつづけ』 駿河台出版
- 大木充・小田登志子・岩根久 (2025) 『AI を外国語教育で使わない選択肢はもうない』 ひつじ書房
- 大木充 (2025) 「AI と CEFR」 『AI を外国語教育で使わない選択肢はもうない』 ひつじ書房 75-89 頁
- 小田登志子 (2023) 「英語教育と機械翻訳が協働する国際交流」 『英語教育と機械翻訳——新時代の考え方と実践』 金星堂 147-167 頁
- 小田登志子 (2024) 「生成 AI により一般教養英語はより実用志向へ」 『人文自然科学論集』 155 号 3-26 頁 東京経済大学
- 金丸敏幸 (2024) 「ChatGPT が語学 (英語) 教育に与えたインパクト」 第 83 回大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム (2024 年 12 月 3 日) 国立情報学研究所・大学の情報環境のあり方検討会主催 chrome-extension://efaidnbmninnnibpcajpglclefindmkaj/https://www.nii.ac.jp/event/upload/20241203-4_kanemaru.pdf (2025 年 7 月 28 日閲覧)
- ポスト言語教育エキスポ 2025 (n.d.) <https://padlet.com/shiensakai/2025-2a2xznw9z9q4fjmd> (2025 年 7 月 28 日閲覧)
- 酒井邦嘉 (2024) 『デジタル脳クライシス——AI 時代をどう生きるか』 朝日新聞出版
- 大修館書店 (2025) 『英語教育』 2025 年 8 月増刊号 Vol. 74 (6) 『英語教師のための生成 AI 活用ガイドライン』 大修館書店
- 瀧田健二・宮崎智 (2025) 「東京都立学校の生成 AI サービス「都立 AI」活用の展望」 『英語教育』 Vol. 74 (6) 大修館書店 52 頁

- TBS NEWS DIG (2022)「英語が必要かどうか、今後、二極化していく」これからの日本の英語教育を 成田悠輔×小川彩佳×山本恵里伽【news23】2022年12月9日 https://www.youtube.com/watch?v=JxYLph43AEg&ab_channel=TBSNEWSDIGPoweredbyJNN (2025年7月29日閲覧)
- Transable (n.d.) Transable. <https://transable.net/> (2025年7月28日閲覧)
- 成田潤也 (2025)「AI あるのに、なんで英語勉強するの？」日本経済新聞 2025年2月1日 YouTube https://www.youtube.com/watch?v=ZF7T2MLUvHA&ab_channel=%E6%97%A5%E6%9C%AC%E7%B5%8C%E6%B8%88%E6%96%B0%E8%81%9E (2025年7月28日閲覧)
- 西山聖久 (2024)『ChatGPT を活用した英語論文執筆の基本』化学同人
- 水本篤 (2025)「AI とライティング教育——英語ライティング教育における生成 AI の活用と課題」『AI で言語教育は終わるのか？——深まる外国語の考え方と学び方』くろしお出版 136-153 頁
- 宮澤淳一・北野ゆき (2025)「生成 AI 環境での言語文化教育を考える」『予稿集+』91-92 頁 言語教育エキスポ 2025
- 文部科学省 (n.d.1)「「AI の活用による英語教育強化事業」について」 https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/mext_00009.html (2025年9月21日閲覧)
- 文部科学省 (n.d.2)「AI の活用による英語教育強化事業プラットフォーム」 <https://ai-eigo.mext.go.jp/> (2025年9月21日閲覧)
- 柳瀬陽介 (2025)「「創造的破壊」の波に乗れ——英語教師の挑戦と責務」『英語教育』Vol. 74 (6) 大修館書店 80-83 頁
- 山田優 (2025)『ChatGPT 英語学習術』アルク
- 李在鎬・青山玲二郎 (編著)『AI で言語教育は終わるのか？——深まる外国語の考え方と学び方』くろしお出版
- 立命館大学 (n.d.)「PEP について」 <http://pep-rg.jp/about-pep/> (2025年7月28日閲覧)
- 幸重美津子 (2023)「教養英語と機械翻訳——考え方と授業例」『英語教育と機械翻訳——新時代の考え方と実践』金星堂 193-214 頁

〈英語・フランス語〉

- British Council (2024). Artificial intelligence and English language teaching: Preparing for the future. chrome-extension://efaidnbmnribpcajpcglclefindmkaj/https://www.teachingenglish.org.uk/sites/teacheng/files/2024-08/AI_and_ELT_Jul_2024.pdf (Retrieved on 2025. 7. 27)
- Fox News Clips (2025. 5. 28). Professors turn to old-fashioned methods to beat AI-generated work. https://www.youtube.com/watch?v=pLPZrrewKuk&ab_channel=FoxNewsClips (Retrieved on 2025. 7. 27)
- JACET (2025). *The 64th JACET International Convention Program*. chrome-extension://efaidnbmnribpcajpcglclefindmkaj/https://www.jacet.org/wp-content/uploads/05_20250801JACET64thConvention_Program_v14.pdf (Retrieved on 2025. 9. 1)
- Holec, H. (1979). *Autonomie et apprentissage des langues étrangères*. Paris: Hatier.
- Klimova, B., Pokhara, M., Benites, A.D., Lehr, C., & Sanchez-Stockhammer, C. (2023). Neural machine translation in foreign language teaching and learning: a systematic review. *Education and Information Technologies*, 28 (1), 663-682.

- KOTESOL (n.d.). *Conference Program Book*. https://ic2025koreatesol.org/conference-program-book/?_ga=2.166416126.1321691732.1753588282-1781955878.1737614774 (Retrieved on 2025.7.27)
- Lee, S. M. (2021). The effectiveness of machine translation in foreign language education: a systematic review and meta-analysis. *Computer Assisted Language Learning*, 36 (1-2), 103-125.
- Lo, C. K., Hew, K. F., & Jong, M. S. Y. (2024). The influence of ChatGPT on student engagement: A systematic review and future research agenda. *Computers & Education*, 219, 105100.
- Nakaya, Y. (2011). Teachers' readiness for promoting learner autonomy: A study of Japanese EFL high school teachers. *Teaching and Teacher Education*, 27 (5), 900-910.
- Mizumoto, A. (2023). Data-driven learning meets generative AI: Introducing the framework of metacognitive resource use. *Applied Corpus Linguistics*, 3 (3), 100074.
- Oda, T. (2025.7.16). Evolving with AI: The Future Direction of English Education. *International Summer School of Beijing International Business and Economics 2025*.
- Ohashi, L. (2024). Machine translation in language education: a systematic review of open access articles. *Kenkyu Nenpou*, 70, 105-125.
- Open AI (2025.7.29). Introducing Study Mode. <https://openai.com/index/chatgpt-study-mode/> (Retrieved on 2025.7.30)
- Teng, M. F. (2024). "ChatGPT is the companion, not enemies": EFL learners' perceptions and experiences in using ChatGPT for feedback in writing. *Computers and Education: Artificial Intelligence*, 7, 100270.
- US Department of State (n.d.). Foreign Language Training. <https://www.state.gov/foreign-service-institute/foreign-language-training> (Retrieved on 2025.7.27)
- 〈中国語〉
- 国家發展委員會 (2021) 雙語政策. https://www.ndc.gov.tw/Content_List.aspx?n=A3CE11B3737BA9EB&upn=5137965B2A81A120 (2025.7.27 閱覽)
- 杭州深度求索人工智能基礎技術研究有限公司 (n.d.) Deepseek. <https://www.deepseek.com/> (2025.7.27 閱覽)
- 台灣教育部 (n.d.) Cool English. <https://www.coolenglish.edu.tw/> (2025.7.27 閱覽)
- 中華民國英語文教師學會 (2024) The 33rd International Symposium on English Language Teaching and Learning. <chrome-extension://efaidnbmnnnibpcjpcglclefindmkaj/https://eta.org.tw/wp-content/uploads/2024/06/2024-poster.pdf> (2025.7.27 閱覽)
- 字节跳动 (n.d.) 「豆包」 <https://www.doubao.com/chat/> (2025.7.27 閱覽)